



対訳で楽しむ 『女の一生』²

永田千奈

修道院を出たばかりのジャンヌは恋人との出会いを夢見る。そんな娘の姿を目を細めて見守っているのが、彼女の両親、男爵夫妻である。というわけで、女の一生キャラ図鑑、第2回は、主人公ジャンヌの母、男爵夫人をとりあげる。名前はアデライド。貴族の家に生まれ育ち、文句なしの貴婦人なのだが、その性格は「心優しきミーハーおばさん」。現代なら、さしずめ、ハーレクイン・ロマンスや韓流ドラマに夢中、ワイドショー大好き、といったところだろう。ジャンヌの夢見がちな性格は、この母の影響が大きい。

まずは、アニメにでも出てきそうな迫力の外貌を見てみよう。修道院を出たばかりのジャンヌが、両親とともにレ・プープルの田舎の屋敷に向かう場面、馬車のなかでのワンシーンから。

La baronne, peu à peu, s'endormait. Sa figure¹⁾, qu'encadraient six boudins réguliers de cheveux pendillants, s'affaissa peu à peu, mollement soutenue par les trois grandes vagues de son cou, dont les dernières ondulations se perdaient dans la pleine mer de sa poitrine. Sa tête, soulevée à chaque aspiration, retombait ensuite ; les joues s'enflaient, tandis que, entre ses lèvres entrouvertes, passait un ronflement sonore²⁾. Son mari se pencha sur elle, et posa doucement, dans ses mains croisées sur l'ampleur de son ventre, un petit portefeuille en cuir.

訳 男爵夫人は、徐々に眠りに落ちていった。ブーダンソーセージを思わせる、同じ大きさにきっちりとした六本の巻き髪がその顔を囲んでいる。夫人の上半身は、徐々に前に傾いていく。その頭を辛うじて支えている首は波模様を描く三重顎にうずもれている。しかも、三重顎の最後の波は、でっぴりとした胸の大海へと続いているのだ。呼吸にあわせて頭が上下している。頬が膨らんだかと思うと、半開きになった唇から、大きないびきがもれてきた。むっちりした手は腹のうえで組まれている。男

爵は、夫人のほうに屈みこみ、その手のなかに、小さな革財布をそっとおいた。

注 1) 一文が長いので、区切って訳した。figure は「顔」だが、文脈によって、「上半身」「頭」と訳しわけることで、夫人の動きが「見える」ように工夫。2) ronflement だけで充分そうなのに、さらに sonore がつく。この「くどさ」がモーパッサンの描写術。訳では「大きないびき」と強調。

馬車のなかの太った女。モーパッサンの代表作『脂肪の塊』*Boule de Suif* を思わせる場面である。「脂肪の塊」とあだ名される女性は「小柄な体は、^{あぶらぶと}脂肥りで、どこもかしこもまん丸。指など、ぷっくり膨れて、節々だけくびれているところは、短いソーセージを数珠つなぎにしたよう」（新潮文庫、青柳瑞穂訳）と描写されているが、男爵夫人も負けてはいない。だが、そんな外貌にも関わらず、いや、そんな体型になってしまったからこそ、彼女の心は夢の世界に遊ぶ。肥満とそれが原因の心臓疾患に苦しみつつも、若く美しかった頃を懐かしみ、昔もらった恋文を読み返してみたり、あれこれと想像を楽しんだりすることで、現実から逃避していたのだ。

À mesure que sa taille s'était épaissie, son âme avait pris des élans plus poétiques ; et quand l'obésité l'eut clouée sur un fauteuil, sa pensée vagabonda à travers des aventures tendres dont elle se croyait l'héroïne. Elle en avait des préférées qu'elle faisait toujours revenir dans ses rêves, comme une boîte à musique dont on remonte la manivelle répète interminablement le même air. Toutes les romances langoureuses, où l'on parle de captives et d'hirondelles, lui mouillaient infailliblement les paupières ; et elle aimait même certaines chansons grivoises de Béranger³⁾, à cause des regrets qu'elles expriment.

訳 身体つきがどっしりしてくるにつれて、彼女の心はますます詩的な世界へと向かっていった。太りすぎて椅子から動くことさえ億劫になっても、想像の世界ならば、ロマンティックな冒険物語のヒロインとなつてさまようことができるのだ。なかでも、お気に入りの物語があった。オルゴールのねじを巻き、同じ曲を何度も繰り返し聞くように、彼女はその物語を何度も思い返しては楽しんでいった。囚われの女とツバメが登場するような、物憂げな恋物語であれば、どんな陳腐なものだろうと涙がこぼれてくる。ベランジェの卑俗的な流行歌でも、悲恋の歌でさえあれば、彼女は満足だったのだ。

注 3) Pierre-Jean Béranger ピエール＝ジャン・ベランジェ (1780-1857) 詩人、作詞家。

センチメンタルなミーハーおばさんは、噂話が大好き。パリ社交界からは遠い、ノ

ルマンディー暮らしゆえ、情報に飢えているのである。そして、ジャンヌのお婿さん候補、ジュリアン・ド・ラマール子爵が現れると、さっそく、情報収集を兼ねて噂話に熱中する。電話もテレビもネットもない時代、こうした噂話こそが彼女の重要な情報源だったのだ。

M. de Lamare, le père⁴⁾, mort l'année précédente, avait justement connu un ami de M. des Cultaux dont petite mère⁵⁾ était fille ; et la découverte de cette connaissance enfanta une conversation d'alliances, de dates, de parentés interminable. La baronne faisait des tours de force de mémoire, rétablissant les ascendances et les descendances d'autres familles, circulant, sans jamais se perdre, dans le labyrinthe compliqué des généalogies.

Dites-moi, vicomte, avez-vous entendu parler des Saunoy de Varfleur ? le fils aîné, Gontran, avait épousé une demoiselle de Coursil, une Coursil-Courville, et le cadet, une de mes cousines, Mlle de la Roche-Aubert qui était alliée aux Crisange. Or, M. de Crisange était l'ami intime de mon père et a dû connaître aussi le vôtre. (...)

Et des noms, appris et retenus dès l'enfance dans les conversations des vieux parents, revenaient. Et les mariages de ces familles égales prenaient, dans leurs esprits l'importance des grands événements publics. Ils parlaient de gens qu'ils n'avaient jamais vus comme s'ils les connaissaient beaucoup ; et ces gens-là, dans d'autres contrées, parlaient d'eux de la même façon ; et ils se sentaient familiers de loin, presque amis, presque alliés, par le seul fait d'appartenir à la même caste, et d'être d'un sang équivalent⁶⁾.

訳 話すうちに、昨年亡くなった子爵の父親の知人のなかに、男爵夫人の父、キュルトー氏と親しい間柄のひとがいるとわかった。そうした縁を見つけたことで、話が活気づき、縁談の話やら、いついつに何があったという話、親類関係の話などがしばらく続いた。男爵夫人は、信じがたい能力で記憶を手繰り寄せながら、家系図の迷路を戸惑うことなく歩き回り、他家の先祖や子孫のことまで並べ立ててみせた。

「子爵さま、ソーノワ・ド・ヴァルフルール家のことをお聞きになりませんでしたか。長男のゴントランは、クールシルの娘さんと結婚しましたの。そう、あのクールシル・クールヴィルのお嬢さんですよ。で、次男のほうに嫁いだマドモワゼル・ド・ラ・ロッシュ＝オーベールが、私の従姉妹ですの。ええ、彼女はクリザンジュ家とも縁続きで。そうそう、クリザンジュさんはうちの父と親しくしていましたから、子爵のお父様ともお知り合いだったのでは」(...)

親たちの会話を聞きながら、子どもの頃に知り覚えた名前がいくつもよみがえってきた。彼らにとって、家柄のつりあう結婚というのは非常に重要なことであり、社会

的な行事なのだ。彼らは会ったことがない人のことでも知り合いのように話していた。きっと話に出てきた相手のほうでも、同じようにこちらのことを話題にしているのだろう。遠く離れていても、彼らは互いに親しみを感じ、友人や親戚のような感覚をもちあっているのだ。共通点は、ただ同じ社会階級に属し、同じような家柄であるということだけだというのに。

注 4) le père de Julien 5) = la baronne, la mère de Jeanne 6) ここでの sang は、「血縁」ではなく「血統」「血筋」

こんな男爵夫人も、根は善良な良妻賢母である。適当にアヴァンチュールを楽しみ、夫の浮気も大目に見て、夫婦仲は良い。ひとり娘のジャンヌを溺愛しており、娘の結婚初夜には、号泣しながら新郎に「娘を頼みますね」と訴える。涙もろくて、笑い上戸、女中のロザリを含め、皆に愛情を注ぎ、そのためには散財も気かけない。理知的とは言えないが、どこか憎めない人物なのである。

少女時代のほとんどは修道院暮らしだったとはいえ、こんな母を見て育ったジャンヌが、自身はどんな結婚をするのか、次回はジャンヌの夫、ジュリアンを取り上げる。

訳題の功罪 (2)

前回、『女の一生』という訳題は、原題に必ずしも忠実なものではないことを述べた。だが、その一方、1913年に初訳が刊行されて以来、この訳題が多く日本人の心をとらえ、日本の作家にインスピレーションを与えてきたのも事実だ。1932年、山本有三は朝日新聞で長編連載を始めるにあたり、「女の生涯を書くことはモーパッサン一人にしか書けないものでもありますまい」と書き、タイトルを『女の一生』とした。山本作品のヒロイン、御木允子は女医である。彼女は私生児をみごもり、夫にも息子にも頼らずに力強く生きる。いつも受け身で頼りないジャンヌとはまったく異なる人物像である。19世紀から昭和へ、国境を越えた『女の一生』は、人間の弱さを浮き彫りにした文学から、力強い女性像の文学へと進化した。1945年に発表された森本薫の戯曲『女の一生』でも、杉村春子演じるヒロインは、自らの選んだ道を突き進む。

東京都三鷹市の山本有三記念館 (<http://mitaka.jpn.org/yuzo/>) では、現在、モーパッサン、山本有三、森本薫、それぞれのヒロインを比較する「三人の『女の一生』展」を開催中(来年2月まで)。ほかに、遠藤周作の小説『女の一生』もある。同タイトルの作品がこれだけ数多く存在し、そのうえ名作揃いというのは、なかなか珍しいことではないだろうか。

※ 原文は *Une vie*, Le Livre de Poche 版から引用。

※ 訳文は拙訳『女の一生』(光文社古典新訳文庫)を使用。

(ながた・ちな)